パネルディスカッション | 肛門科

2026年11月21日(土) 15:20 ~ 16:35 | 第7会場（1F 会議室107）

パネルディスカッション 11　それホントに手術適応？裂肛の治療：保存と手術

司会：八子 直樹（医療法人桜樹会　八子医院）、錦織 直人（一路会錦織病院）

[PD11-2] 当科における裂肛診療

*小野 朋二郎[1]、光藤 傑[1]、辻村 直人[1]、渡部 晃大[1]、三宅 祐一朗[1]、竹中 雄也[1]、斎藤 徹[1]、竹中 玲子[1]、相馬 大人[1]、安田 潤[1]、根津 理一郎[1]、弓場 健義[1] (1. 伯鳳会大阪中央病院外科)

急性裂肛は肛門管上皮が物理的に損傷され裂創が生じた結果，排便時出血や肛門痛といった症状を呈したものが急性裂肛である．これに括約筋の緊張亢進や肛門管の虚血性変化が加わり、さらに裂肛が生じやすくなるという悪循環により裂肛が慢性化した結果，肛門管上皮に深い潰瘍が形成されたて難治性の慢性裂肛が形成される．急性裂肛に対しては食事療法や緩下剤，さらに外用剤による保存的治療が適応となる．本邦では保険承認されていないものの，括約筋の緊張亢進に対してはニフェジピン軟膏やボツリヌス毒素注入などの奏功も報告されている．一方虚血性変化から慢性裂肛に至ると保存的加療での改善には限界があり，基本的には手術療法が適応となる．しかしながら，慢性裂肛を肛門管上皮に生じた潰瘍であると見做すことで皮膚潰瘍の治療薬が奏功することが期待でき，本来手術適応となる慢性裂肛が保存的に改善できる可能性があると考える．実際に我々はこのような慢性裂肛の症例に皮膚潰瘍治療薬であるブクラデシンナトリウム軟膏を使用することで手術を回避する工夫を行っている．裂肛初診患者の経過を，ブクラデシンナトリウム軟膏の効果を中心として診療録を参照して後方視的に検討するとともに，当科で行っている裂肛に対する手術療法について動画で供覧する．

2023年4月から2026年3月までの3年間に筆頭演者の外来を受診した裂肛初診患者は433例であった．男性220例，女性213例で男女比はほぼ同等であった．年齢の平均は49.5歳であった．多くの症例が急性裂肛であり食事療法や軟膏の外用などの保存的加療で軽快したが，初診時に慢性裂肛であったもの，もしくは経過中に慢性化した症例が172例あった．このうち121例にブクラデシンナトリウム軟膏による保存的加療が施行され，64例（52.9%）で症状が軽快した．また部分的に症状が改善した症例が39例（32.2%）あった．ブクラデシンナトリウム軟膏を使用した症例のうち，手術療法を施行した症例は38例であり，83例（68.6%）で手術療法を回避できた．

©一般社団法人 日本大腸肛門病学会